

日本鱗翅学会中国支部会報

第11号



2010年4月

日本鱗翅学会中国支部

目次

中国支部第11回例会・総会の報告(事業報告, 会計報告, 役員改選, 懇親会など)……………	1-2
発表要旨	
1.「白水隆アルバムー日本蝶界の回想録」制作余話 ver.2(*印:演者) 淀江賢一郎*(島根県)・難波通孝(岡山県)……………	3-5
2.山口県の鱗翅目の動向(2009) クロマダラソテツシジミとヤクシマルリシジミについてーその拡散と生態などー 後藤和夫(山口県)……………	6-12
3. 2008年瀬戸内地方でのクロマダラソテツシジミ発生を俯瞰して 三宅誠治(岡山県)……………	13-17
4.鳥取県倉吉市の南方系鱗翅目の動向について 田村昭夫(鳥取県)……………	19
5.平安京近郊のギフチョウー記録の収集と生息域の推定 渡辺一雄(広島県)……………	18-19
日本鱗翅学会中国支部の体制と連絡先(2010ー2012年)……………	20
ご挨拶(自己紹介を兼ねて)……………	21
会員の近況報告	
沖縄本島の“蝶”と“蜻蛉”撮影記 後藤和夫(山口県)……………	22-25
お知らせとお願い……………	26
1. 事務引き継ぎ	
2. 支部助成金	
3. 会員名簿等の取扱いと経費の節減	
4. 支部会報の原稿を募集	
5. 寄贈図書等の取り扱いの変更	
6. 第12回支部例会のご案内	
7. 日本鱗翅学会入会のおすすめ	
日本鱗翅学会中国支部規約……………	表紙3

<表紙写真説明>

山口県で発見されたクロマダラソテツシジミ *Chilades pandava* ♀(低温期型)
2009年10月20日 山口県宇部市際波(後藤和夫氏:撮影)

中国支部第 11 回例会・総会の報告(2009 年 11 月 21 日)

支部例会は年1回、中国 5 県を巡りながら開催されています。今回の当番県は島根県。会場は第 51 回鱗翅学会全国大会も開いた島根大学の学生会館(松江市西川津町)。1 年前には予約していたのですが、部屋番号をうっかりして、想定外の狭い会場になってしまいました。司会は星川和夫先生(島根大学生物資源科学部教授)。後藤和夫支部長のあいさつをいただき、さっそく研究発表会。計 5 題、各自 30-45 分の持ち時間でも話しきれないほどのボリュームがありました(3-19 ページに要旨)。質疑時間がほとんどとれなかったのは反省点。15 分のコーヒープレイク後に、総会が後藤支部長の仕切りで進行されました。

事業・会計報告:後藤支部長から会誌発行ほか会務と事業、助成金申請などについて、伊藤靖子氏からは会計報告がなされ、すべて承認されました。

第 56 回大会報告:11 月 7-8 日に名古屋市名城大学で開催された全国大会および評議員会に出席された三宅誠治氏から、大会の様子や評議員会での議案や通知事項などの報告がありました。

役員改選(任期は 2010 年 4 月-2012 年 3 月)

5 年つとめられた後藤和夫支部長の後任は、島根大学の星川先生のご協力が得られるということで淀江が担当することになりました。事務局の住所は島根大学生物資源科学部の中におくこととなります。会員数の少ない中国支部が支部報を継続発行し活発に活動を展開できたのは、初代の渡辺一雄先生、二代目の本田計一先生が基礎を固めたあと、後藤支部長の果たされた役割が非常に大きかったと思います。合わせて裏方を支えられた事務局の川元裕氏、会計の伊藤靖子氏の 3 氏に深い感謝の気持ちをこめて皆で拍手を送りました。

新支部長:淀江賢一郎(島根県)、**事務局担当:**星川和夫、**会計担当:**野口祐美子。

新支部幹事:山口県:中西 淳、広島県:神垣健司、岡山県:若槻匡志、鳥取県:田村昭夫。

新中国支部自然保護委員長:伊藤國彦(岡山県)

委員:後藤和夫(山口県)、渡辺一雄(広島県)、田村昭夫(鳥取県)、淀江賢一郎(島根県)。(順不同)

2009年度支部会計報告

2009.12.31現在

○収入の部

項目	金額	備考
前年度繰越金	129,754	
2009年度支部交付金	12,800	64人×200円
2009年度支部活動助成金	22,650	
例会時の残金	421	
預金利子	76	
計	165,701	

○支出の部

項目	金額	備考
支部会報第10号印刷費	20,265	1部203円×100部
支部会報第10号ほか送料	12,650	案内状含む *一部メール使用
事務消耗備品費	16,625	印刷用紙、インク、トナー、封筒など
雑費	3,100	例会時の写真代
計	52,640	

○2009年度繰越金

165,701円-52,640円= 113,061 円

発表:

- (1) 淀江賢一郎*(島根県)・難波通孝(岡山県):「白水隆アルバムー日本蝶界の回想録」制作余話 ver.2 (*印:演者)
- (2) 後藤和夫(山口県):山口県の鱗翅目の動向(2009)クロマダラソテツシジミとヤクシマルリシジミについてーその拡散と生態などー
- (3) 三宅誠治(岡山県):2008年瀬戸内地方でのクロマダラソテツシジミ発生を俯瞰して
- (4) 田村昭夫(鳥取県):鳥取県倉吉市の南方系鱗翅目の動向について
- (5) 渡辺一雄(広島県):平安京近郊のギフチョウー記録の収集と生息域の推定



渡辺一雄先生, 平安京近郊のギフチョウについて

懇親会:

総会終了後は学生食堂に移って懇親会。星川先生の配慮で安くて料理の旨い会場をとることができました。夜暗くなってから到着された伊藤國彦先生を含め、懇親会参加者は16名。自己紹介と最近の取り組みを話す一人一話のあとは情報交換。伊藤先生からは編集中の「衰亡と保護第6集:日本産蝶類レッドデータ」の資料が配布され説明がありました。全員がこのあとさらに松江市の繁華街に繰り出して二次会、夜遅くまでこちよい刺激を受けることができました。

最後に、会場設営(看板設置, プロジェクター準備など)、懇親会場の片づけなどで星川研究室の学生さん2人(松田英嗣氏, 小泉達也氏)にたいへんお世話になりました。お礼申し上げます。

出席者:

岡山県:伊藤國彦, 三宅誠治, 吉田嘉男, 若槻匡志, 鳥取県:矢野重明, 田村昭夫, 佐々木英之*, 広島県:渡辺一雄, 山口県:後藤和夫, 伊藤靖子, 中井 衛, 武次房江, 島根県:淀江賢一郎, 星川和夫, 筆谷憲一, 三代成実*, 津森正二*, 松田英嗣*, 小泉達也*。計19名(順不同, 敬称略。*印は非会員)



懇親会終了後の集合写真(島根大学学生食堂)

「白水隆アルバム－日本蝶界の回想録」制作余話 ver.2

淀江 賢一郎*(島根県)・難波 通孝(岡山県)

本書は2007年度の日本蝶類学会・磐瀬賞を受賞した。日本蝶類学会総会で制作過程を発表したが、その後かなり修正したので、日本鱗翅学会中国支部例会でも改めて発表することにした。

写真は4,700点余と大量に集まったが、ほとんどのものにウラ書きがなかった。虫屋さんは「いつ」「どこで」「誰が」などデータを重視する。そのため、編集作業の大半は写真に写っている人たちの解明にあてることになった。国内外、朝比奈正二郎、伊藤修四郎、大野正男、田中誠、妹尾俊男、室谷洋司、浜栄一、若林守男、福田晴夫、荒巻健二、余清金、陳文龍の諸氏ほかたいへんに多くの方々にお世話になった。そのさいのエピソードをいくつか紹介する。また、意外なことに順風満帆ではなく波乱万丈の生涯であったこと、全国のアマチュアを長年わけへだてなく指導したことがもつとも偉大な業績だったと思うことなどを紹介する。(*印:演者)

編集体制:委員長・矢田脩, 編集委員:淀江賢一郎・難波通孝・谷角素彦・福田治・杉元勝・小田切頭一
 発行人:西山保典, 協力:白水房江

発行部数:473部

編集方針:①写真, 手紙, 肉筆原稿などでビジュアルに構成する。

- ②蝶の神様といわれた先生の生い立ち, 業績, 交遊が浮かび上がるようにする。
- ③蝶の好きな人たちをやさしく見守る先生のお人柄が浮かび上がるようにする。
- ④日本における蝶研究100年の歩みと, その全体像が浮かび上がるようにする。

内容:回想のアルバム: 9-150, 書簡で見る白水蝶学: 151-272, 白水隆・略年譜: 273-310,
 物故・日本の蝶研究者, 肖像写真と略歴: 311-330, 蝶に魅せられ: 331-348,
 著作目録・追悼文目録・著作への書評: 349-365

白水隆アルバム・制作余話 ver.2

チョウの神様, 白水隆先生の
 生立ち・業績・交遊・お人柄など



2004年3月28日 午後1時21分

2009年11月21日
 日本鱗翅学会中国支部総会
 淀江賢一郎*・難波通孝

アルバム編集経過

- 2005年12月 難波通孝さんから淀江あてに電話。「アルバムが欲しいネ」
- 2005年12月31日 西山保典さん(白水隆文庫刊行金代表)の了承を得る。
- 2006年1月28日 難波さん宅(岡山)に白水房江さんと淀江が集まり, 考え方のすりあわせ。矢田脩先生にメールでご了解, ご賛同をいただく。
- 2006年4月1日 偲ぶ会(3回忌)にて, 計画を発表, 出席者の賛同を得る。
- 2006年4月1日 第1回編集委員会(福岡, 都ホテル)
- 2006年5月6日 予算, 広告, スタッフ, スケジュール, 全体の構成案を決定。写真とハガキ提供の呼びかけと予約申込のダイレクトメール発送(先生の年賀状リストから700通, および100の同好会あて)。
- 2006年9月23日 広報宣伝を兼ねて写真展(東京, インセクト・フェア会場)
- 2006年11月11日 第2回編集委員会(奈良, 近畿大学)。編集を淀江と難波に一任。
- 2006年11月 中間報告を兼ね写真展240枚(奈良, 第53回鱗翅学会大会)
- 2007年1月20日 岡山で泊り込みの編集合宿を2回(計6泊7日)(難波, 淀江)
- 2007年5月 初校(すべての項目を見開き完結方式で, 組むことを決定)
- 2007年6月 再校(このとき, 回想のアルバム, 書簡で見る白水蝶学を決定)
- 2007年7月 参校(このとき, 函, 表紙, 大原デザインを決定)
- 2007年8月 完成(473部+20部, A4判, 368pp.)

編集経過など



2006.1.28 難波通孝さん宅にて打ち合わせ。



2006.4.1 第1回編集委員会(福岡市)

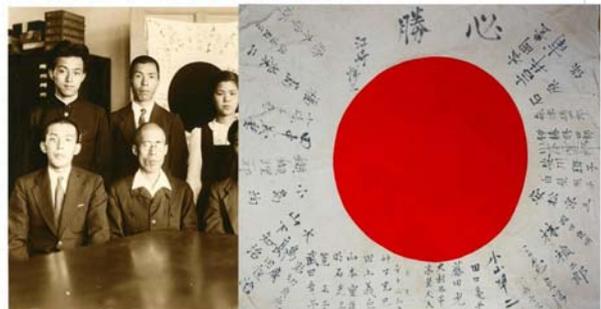


2006.11.11 第2回編集委員会(奈良市)



2006.11.10 鱗翅学会大会にて写真展(近畿大学)

陸軍に召集(入営前日)



1944年5月14日, 想像を絶する鬼気, 重苦しい雰囲気伝わってくる。26歳。森本桂氏・伊藤修四郎氏提供。

この日章旗は没後, 奥様によって, 仏壇の後ろから発見された。

白水先生と環境問題の関わり

- 1965年 鱗翅学会自然保護委員会、初代委員長
- 1966年 昆虫学会自然保護委員会、初代委員長
- 1974年頃 湯布院で「環境指標としての蝶」講演
- 1978年 環境庁自然環境基礎調査専門委員
- 1982年 「日本の重要な昆虫類」執筆
- 1986年 環境庁野生生物保護対策検討委員
- 1990年 第1回蝶類保護セミナーで「蝶類保護の歴史と現状」講演
- 1991年 「日本版レッドデータブック」執筆
- 1992年 鱗翅学会大会で「九州の蝶とその衰亡」講演
- 1993年 九州高地植物保護協会、会長
- 1995年 「日本野生生物目録」執筆

2004年「僕の人生は、自然保護が究極の目的ではなかったかと思う」(ALPA,14号)

発表年	著作名	代表的な意義、論文	発表年	著作名	代表的な意義、論文
1931	2	アザミハトの寄託	1970	13	鱗翅類の新しい見方
1932	1	鱗翅の結合による系統の消失の一例	1971	10	「原色写真」の出版
1933	3	「原色」の出版	1972	15	九州のオオカブタの産地をめぐって
1934	9	九州産 Lepidoptera 類に就いて	1973	23	ベニシロカラスツバの1新変種
1935	3	福岡市付近の蝶類(第1回)	1974	10	新しく発見されたツバの2新種
1936	1	オオカブタの産地をめぐって	1975	9	「原色」の出版
1937	10	九州に於けるカラスツバ	1976	7	海馬の昆虫標本目録
1938	10	福岡のオオカブタ	1977	9	「蝶」の出版
1939	5	九州より未知の天牛の産地	1978	12	丹波のオオカブタ
1940	1	「原色」の出版	1979	16	アザミハトの寄託
1941	7	本邦産アザミハト類の概観(1)	1980	18	海馬昆虫標本目録
1942	7	本邦産アザミハト類の概観(2)	1981	20	「蝶類保護の歴史と現状」の出版
1943	22	「原色」の出版	1982	11	「日本の重要な昆虫類」の出版
1944	5	「原色」の出版	1983	7	「原色」の出版
1945	0		1984	8	中国地方の天牛類
1946	1		1985	8	「日本産蝶類目録」の出版
1947	13	西原支那産蝶類の概観に就いて	1986	6	台湾産蝶類目録
1948	6	「原色」の出版	1987	4	1986年の蝶類
1949	3	「原色」の出版	1988	13	クワツバの産地をめぐって
1950	12	「原色」の出版	1989	13	「原色」の出版
1951	16	「原色」の出版	1990	4	蝶類保護の歴史と現状(日本の場合)
1952	3	「原色」の出版	1991	9	「原色」の出版
1953	7	「原色」の出版	1992	11	九州における蝶類の産地と保護(調査報告)
1954	13	「原色」の出版	1993	9	九州の蝶類とその産地(調査報告)
1955	17	「原色」の出版	1994	7	「原色」の出版
1956	15	「原色」の出版	1995	8	「原色」の出版
1957	12	「原色」の出版	1996	8	「原色」の出版
1958	16	「原色」の出版	1997	5	中国地方の蝶類分布の特殊性(内報)
1959	12	「原色」の出版	1998	9	土着種、移住種、移住種などの用語
1960	5	「原色」の出版	1999	9	九州の蝶類とその産地(調査報告)
1961	7	「原色」の出版	2000	8	「原色」の出版
1962	18	「原色」の出版	2001	4	「原色」の出版
1963	9	「原色」の出版	2002	4	2001年の蝶類をめぐって
1964	10	「原色」の出版	2003	6	「原色」の出版
1965	6	「原色」の出版	2004	4	「原色」の出版
1966	9	「原色」の出版	2005	4	「原色」の出版
1967	9	「原色」の出版	2006	4	「原色」の出版
1968	7	「原色」の出版	2007	4	「原色」の出版
1969	8	「原色」の出版	2008	6	「原色」の出版

1958年(41歳)～1966年(49歳)に図鑑6冊(1500ページ！)

蝶の報文数、執筆者番付

横綱	岩田 靖	1,270編	中西元男	885編
	高橋真弓	905編		
大関	磐瀬太郎	698編	高橋英樹	674編
	白水 隆	660編	田中 洋	591編
関脇	福田晴夫	541編	西山保典	493編
	浜 栄一	438編	高橋 昭	426編
	小路嘉明	335編	大塚 勲	321編
小結	怒和貞賞	239編	江崎虎三	208編
	日浦 勇	193編	玉置高志	195編
	北条篤史	178編	矢田 脩	170編
	田中 蕃	162編	葛谷 健	152編

白水隆・日本産蝶類文献データベースより(2000年末までの集計)

白水隆・略々年譜

0	1917.1.6	誕生	1896合併後合
6	1923.1.12	父、他界	1928台北帝大、入学
7	1924.1.13	冷泉小学校入学	
13	1930.5.5	福岡大学入学	江崎虎三に会う
16	1935.10	宮崎高等農林入学生(福岡高校受験に失敗)	「原色の昆虫採集」(原色千種昆虫採集)発表
19	1936.8.11	福岡大学に入学	鹿野忠雄に会う
21	1939.5.13	宮崎高等農林卒業(一年浪人)	志賀良吉及社説立、ヒサマツドリ発見
22	1939.5.14	九州帝大に入学	昭和前期昆虫採集黄金時代
23	1940	奈良本太郎、柴谷篤弘、伊藤修四郎と会う	
24	1941.5.16	九州帝大卒業(2年9か月)	
25	1942.5.17	九州帝大、退学	
1943		井上喜、東沢良彦、林隆、平山修次郎と会う	
27	1944.5.19	召集令状	
28	1945.5.20	自宅全壊(柱木、文章を失う)	
29	1946.5.21	就職	
32	1949.5.24	九大、農学部助教授	このころ全国に地方昆虫同好会がおこる
34	1951	「日本産蝶類目録」(計四の修正)	昭和前期昆虫採集黄金時代
35	1952	熊本県市、五十嵐道・藤岡知夫と会う	
40		江崎虎三、没(88歳)	
44	1961.5.36	理学博士(北大)取得	このころから「文庫目録」(分布表)
45	1963.5.38	合済講義(計3回)	「原色」の出版
47	1964.5.39	母、他界	「原色」の出版
52	1969.5.44	大学給掌退任	養訓本部、没
53	1970.5.45	福岡学芸会、会長(6期18年)	
64	1981.5.56	九大、定年退官(北九州市市博、顧問就任)	「原色」の出版
67	1984.5.59	妻、他界	「原色」の出版
73	1991.11.13	第二等	「原色」の出版
81	1999.11.11	再婚	昭和前期昆虫採集黄金時代
85	2003.11.15	鎌倉、鎌倉	
86	2004.11.16	4月2日、没(86歳)	

順風満帆ではなく、波乱万丈の人生だった！



肖像写真をさがしています。

ご存命の方がおられるかも知れません。そのときにはお許しをください。

- ブライヤー 仁禮景雄 秋山 元 柴崎虎五郎
- 渡辺亀作 川平平吉 矢島正保 朝倉喜代松
- 荒川節士 池田成美 趙 福成 伊藤三男作
- 軽海軍馬 永沢定一 岩淵文人 井崎市左衛門
- 尾高朝雄 佐々亀雄 神田重夫 村越三千男
- 中山周平 山本茂信 荒木東次 阪口総一郎
- 中林馮次 林 実 矢後正俊 齊藤隆四郎
- 荒木三郎 久崎光生 織田一磨 吉阪道雄ほか

浜田光司氏を悼む



松江市にて発送作業。無事完了。2007.8.30

「磐瀬賞」(日本蝶類学会)を受賞。2007.12.16



出版祝賀会。鳩山大臣も参加。2007.10.20

編集委員全員が参加。2007.10.20(博多)



2007年8月30日、発送終了後の軽い打ち上げ。

浜田光司氏(高浜印刷)は、この直後、肺がんに罹患、手術されたが、2009年6月23日逝去された。謹んでお悔やみ申し上げます。

山口県の鱗翅目の動向(2009)

<クロマダラソテツジミとヤクシマルリジミについて> —その拡散と生態など—

後藤 和夫(山口県)

I. クロマダラソテツジミ *Chilades pandava* が県内で発見される

関西地方ではここ二年間、中国地方は岡山、広島県での発生が2008年に報じられ全国的に話題を提供している種だが、下関市安岡で2009年8月24日に角田正明氏から1♂発見の報がもたらされ、即日川元裕氏により1♂採集・2♂確認され、山口県内の初記録となった。

それから同好者による調査が行われ、次第に県内各地の状況が明らかになった。これから本種について追跡調査を実施した結果、若干の考察を論じてみたい。

分布の拡散について(市町ごとに順を追って説明)

発見地下関市内の状況は24日以降綾羅木、吉見、吉母、内日地区をかきわきに、旧市内は約2週間で全域の分布調査が終了した。それと並行した調べで豊浦町、菊川町、豊田町、豊北町と現在の下関市全域から成虫の確認がなされた。豊北町で確認した日は9月24日で一ヶ月間を要したことになる。

次に山陽小野田市・宇部市からは9月11日が最初の確認で、既に複数の場所からの発見であったことから、両市内各所に分散していることが伺えた。その後17日に下関に近い山陽小野田市の埴生で1♂の採集があったが、10日にここから3km下った下関の王喜で発生を確認しており、その時埴生地区も調査したが、確認できなかったのは単なる見落としと考えている。また10月に入り21日に西宇部と西岐波で相次いで♀が見つかり、23日には羽化する個体や24日には別の場所で10頭以上の♂が確認できた。また11月3日は前夜この秋一番の冷え込み(夜半5℃、朝方8℃)にも関わらず、日中15℃の中で成虫の活動を確認し、更に月末の25、26日でも飛翔していた。

県中央部となる山口市や旧秋穂町の海岸線は発見当時から注視していたが、9月27日にやや内陸に入った鑄銭司と防府市右田からそれぞれ幼虫が確認された。秋穂については10月17日の1♀となり、食樹となるソテツの多さから見て意外に遅い記録となった。

また瀬戸内側の東部岩国市で10月10日に1♀が発見され、続けて12日から18日にかけて柳井市、田布施町、平生町、周防大島町(屋代島)、光市と見つかり、ほぼ同時の12日に下松市(笠戸島)と県東部から記録が相次いだ。

この調査期間中の9月24日に島根県の益田市から1♀採集、1♀確認の報がもたらされた(小坂、2010で報告予定)が、これについては後に見解を述べる。

なお山陰側については下関以外北部からは成虫が見られなくなったこともあり、9月末頃から10月末日にかけて侵入と拡散ルートを探る痕跡調査を並行して実施してきたが、その結果山陰海岸沿いで食害痕を見出したソテツの主な確認地点は次のような行政区からであった。

長門地区(油谷町、日置町、長門市、三隅町)、萩地区(萩市、須佐町、田万川町)と阿武町からで、山陰側全ての行政区で本種が一時的に発生したことが明らかになった。また食痕調べでは美祢市美東町と防府市久兼、富海、向島からも確認したので追記しておく。

その他の調査地として11月に入って内陸部の阿東町の各所があるが、ソテツの発見に至らなかった。

下関を起点として分布を拡散した理由について

第一発見地であることと、その後の調査からも下関を越す発生地は見いだせないことから結論付けたが、その理由の一番として内日地区の発生地では爆発的に本種が羽化したことが観察から明らかになった。第一発見地へはここから発生した個体が、広がっていった可能性もある。また当地から発生した個体は、川棚の小串方面へと分散していった。小串は現在判っている中では、ソテツを植栽している本数が群を抜いて多く(50m四方の土地に高さ2m以上のソテツが100本程度植えられている)、9月17日からの観察では徐々に成虫が増えだし、特に10月半ば頃にはかなりの個体数となり、22日には羽化したばかりの成虫と多くの蛹を確認した。食害痕も5株程度もあったことから、その数は千を超える成虫が羽化すると推察できた。羽化する状況は10月末日になっても継続していた。このことはこれだけまとまった数のソテツであれば、10月になっても芽吹きす

る新葉も適度にあり、本種にとっては絶好の発生地となって繰り返し持続できたと考えられる。当然発生した個体は新葉を求め分散することはその生態からも明白となった。

拡散のルートと近県からの状況など

下関を起点として考えた場合、分散・拡散のルートは概三つが考えられる。まず山陽側の海岸線沿いに岩国市に到達したルート。次に下関から菊川、豊田、山陽小野田市から内陸沿いに拡散したルート。もう一つは山陰側の海岸沿(R191号)いに長門市、萩、田万川を經由し島根県の益田市に到達したルートである。

山陽側のルート(R2号・R190号・R188号)は岩国市での発見からまず決定づけられる。内陸のルートは美東町あたりまでは痕跡が掴めたが、その後進展が得られなかった。この原因の一番は内陸の山間部になるほど、ソテツを植栽しているところが県内の場合無かったことで、種の拡散ができなかったことで納得できる。山陰側については田万川町まで途絶えることなくほぼ連続的にソテツが植えられており、これは島根県に入っても同様の状態であることが調べから判った。益田市からの発見個体は、下関で発生した個体が世代交代をくり返しながら到達したと推察している。

ソテツが市町村の中心部となる地域に安定して見られることは自然の生業でもあり、寺や神社に限らず学校、公共の施設や庭園、公園から人家にも植栽して観賞用などとしても楽しんだことは何百年以上も前からのことであることは、確認してきたソテツの樹齢が物語っていた。ただクロマダラソテツシジミにとって食餌にしていたことが幸いし、ここまで拡散し分布を広げたと結論付けられる。

なお山陽側の岩国市から先の広島県にかけてはこの調査から掴んでいないが、既に広島県にも拡散していたと推察している。また関門海峡を挟んだ北九州についての状況も調べるように同好者をお願いしたが、9月末現在その報告は得られていない。ただ福岡市近郷では本種の発生は確認されている。

これから冬期に向かい、2010年度はどの様に推移するのか

個人的な見解だが、本種の耐寒性については5℃程度から15℃程度であれば、成虫は死滅することなく活動することは分かった。幼虫や卵についてはどうであるかは県内の場合まだデータは充分とはいえない。これについては11月の観察と12月に入ってから継続調査が必要だと感じている。ただ耐寒性はウラナミシジミとほぼ同程度と推察しており、12月に入ってから下関などでは観察できると考えている。ただ食餌となるソテツの若葉が芽吹くことは考えにくく、来年度の休眠芽に幼虫が潜り込み、どこまで生育するのか見極めることが課題となる。

岡山県の場合、2008年度の冬は多くは蛹であったものは、春になって羽化するものはなく死滅したとの結果を聞いているが、県内でのデータを把握できればと考えている。

大阪などはここ3年間本種が発生しているようで、これが毎年の様に南から飛来してくるものなのか(人為的要素も報じられているが、ここでは触れない)は、充分なる観察と見聞が必要だと個人的に思っており、ある研究者による見解は、都会の方がより越冬することが可能になると示されており、地球規模の温暖化現象とともに南方種となる本種の動向を見守る必要がある。

生態に関する若干の知見など

1. 夏期(摂氏30℃程度の気温)の観察から、卵から成虫迄の期間は約15日程度である。
2. 9月に入り蛹(直後)を持ち帰り、自然状態で成虫になるまでの日数は一週間程度であった。
3. 10月17日に持ち替えた蛹が自然状態で羽化したのは5日後からであった。(持ち帰る前までに5、6日程度は経過していたと推察)*気温の低下と共に、羽化が遅くなってくる。
4. 昼間の外気温が20℃程度あれば蛹からの羽化は充分可能である。
5. 蛹化場所は、夏場は葉裏などでも簡単に見られる。また夏場であっても綿状になった葉の付け根などに潜り込んだものも多くある。
6. 9月の半ばから10月になって観察した蛹は5の場所か、枯れた実の笠状になった付け根に潜んでいるものが大半であった。
7. 卵は全て若葉に産み付けられ、羽化した初齢幼虫はこれを咬ながら潜り込み、大きくなるにつれて新しい葉の部分求めて移動する。新葉が堅くなるまでの期間は短く、二週間程度で幼虫には不適当な堅さとなる。よって夏場は二週間程度で成虫にまで育つことはこのことから判断できる。ただ外気温が下がるに従って、食物にも生育の消長があり幼虫はある程度これに順応するように感じられる。ただ少なくとも葉が堅くなった時には、幼虫は蛹になっていることは容易に推察できる。

8. 交尾形式は観察した限り全て♀+♂で、無理矢理飛ばした場合、←♀+♂の形態が一般的である。また交尾は雌が羽化した直後に成立するものが多い。羽化する時間帯が15時頃に多く集中するようで、その時間に見る機会が多かった。交尾時間については終わりまで見届ける暇は無かったため定かではない。
9. ♂♀の変異は若干♀が大きい、♂が大きくなるものも見られる。裏翅の地色は茶色がかった灰色をしているが、♂の方がやや濃くなる。これは夏期、秋期においても同様である。また♂♀ともウラナミシジミに一見酷似するが、本種は青色がかっていることで、慣れると見間違うことはなく、その大きさもウラナミシジミより一回り小さい。
10. 県内で発生した個体は夏場と秋期で大きな差は見られない。♂の前翅長は約16mm前後、開翅長は29mm前後、♀の前翅長は17mm前後、開翅長は30mm前後である。なお沖縄本島産のものより一回り大きくなり、八重山諸島産より二回りも大きくなるので、これは南方の方が発生頻度も頻繁であることと、その個体数も圧倒的に多いことなどで、餌となるソテツの生育が間に合わず、不足しているからだと思っている。特に与那国で観察した個体はヤマトシジミの大きさしかなく、確認しないと見間違うところであった。
11. 羽化直後の個体はそのままソテツの葉に止まり、夜を迎えるものも観察できた。
12. 個体の変異は夏期と秋期では斑紋や色彩に変化が見られる。
夏型の個体の翅表は♂は薄青がかかるが、俗に言う低温期型はやや薄紫がかかった青色になる。♀の場合は中央部が深い青色になるが、低温期型は青色が一段と広く発達するようになり、その色も濃い青色となってくる。裏翅においては後翅の広角紋の赤色紋は夏型は大きく濃い、低温期型は赤紋は小さく薄くなる。これは表後翅においても比例してくる。
また後翅中央部の角形紋は夏期は薄くなっているが、低温期型は濃く発達して、その間にある白紋が一段と濃くなり、白さが浮き出た様に目立ってくる。
13. 交尾済みの♀は産卵する新葉がないと発生地に留まらず、直ちに拡散移動を始めるが、♂はこの限りではない。♂の方が羽化した場所に執着する傾向にある。
14. ♂は俗に言う縄張り飛行する時間帯がある。これは昼間の時間帯である。
15. 分布の拡散方向は定まっておらず、種の本能のまま好き勝手に何処ともなく飛来してゆく。これは食樹のまったく見られないところでも、吸蜜個体が観察できることで、意外性が高い種である。このことは一度調べた時には確認できなかったが、その後再訪したときに発見したことなど、発見地が前後していることなどでも分かる。これは食樹のソテツを求め非常に活発に、特別方向を定めるのではなく飛翔していることが分かる。
16. 成虫の活動の時間帯は9時過ぎ頃から16時頃までである。夕方は付近の樹木の高い位置に移動することが観察できた。尚、活動する時間は冬期になるほど気温の低下と共に短くなっていく。
17. ♂同志の飛行は活発で、かなりもつれ合いその早さは、ウラナミシジミと殆ど変わらない。
18. 吸蜜したりソテツなどに止まっている個体はその場所からあまり離れることはなく、比較的長く留まる。翅を広げる仕草や時間帯は多くの蝶とほぼ同じである。
19. クロマダラソテツシジミは年に10数化もするとされる種であることが分かってきた。この様な種は南方の特有ではあるが、それより一段と上回る常識外れの様である。
20. 吸蜜植物については夏から秋にかけて咲く山野草ほか、各種の園芸草花に殆ど飛来する。その時間帯は昼前後頃からのものが多い。

種の移動に関する調査からの見解など

1. 本種の一日の移動距離は数kmから十kmに及ぶと推察できる。山陽側も山陰側も数km前後には殆どソテツが植栽されており、拡散した個体はこれを餌として、北上を続け9月の半ばには県境の田万川町に到達しており、それから10日前後に益田市内に到達したと推察している。これは下関の発見日から数えると一ヶ月間での出来事となる。
なお益田市で発見後、淀江賢一郎氏らによって、浜田市、江津市、大田市、斐川町まで連続的に卵・幼虫が確認されているので補足しておきたい。
2. 山陽側の東部岩国市での確認は10月10日であった。山陰側と同じようにソテツは連続的に植栽されており、拡散の経過はほぼ同じであると見ている。なお岩国市までの距離は約150kmとさほど差異はないが、山陰側に比べ発見された日は約二週間遅いものとなっている。しかしこれは余暇の合間の調べであることなど考慮し誤差範囲だと考えている。
3. 拡散移動(産卵場所を求めての必然的行動)は♀が主体となり、その方向は定まっていない。

山口県への侵入は 2009 年度であったのかなど

始めに述べたように 8 月 24 日が県内で初めて確認された記録となる。

発見後二ヶ月以上に渡り同好者らによる調査が行われてきた(川元, 2010 で報告予定)。その過程で食害痕調べも実施したが、中には発見当時以降と思われるものや、更に古く 2008 年度の痕跡であるような古い葉も確認してきた。当然 2008 年度に於いても一通りの調べは実施しており、その時確認の情報は得られなかったことで、一応未発生だったと結論付けたわけだが、見落としてあったことも考えられなくはない。ただ言えることは、発生したとして冬季を乗り切ることができたのか？ 今回確認した個体は昨年発生した遺伝子をもった個体であったのか？ また今回下関で発見した個体は関門海峡を越えてきた個体であったのか？ など、また下関で発見した個体が、県内の瀬戸内側及び、山陰側を東進したり、北進してきたのかも含め、どちらにしても推論でしか述べることは難しい。

定着する可能性と種にとって障害になることについて

新発見された蝶が定着(土着)する可能性については関心のあることで、同好者であればその様になって欲しいと願うことは共通のことだと思う。さて山口県の場合どうであろうか。少し潮るが、ホソオチョウとアカボシゴマダラについて先に見解を述べてみたい。

二種とも大陸のものであり、緯度・経度から眺めて日本の関西・関東地方で発生をくり返していることは納得できる。ただ輸入種として扱うことが賢明だと考えるが、本種も含めここでは問わない。

クロマダラソテツシジミの場合はどうであろうか。過去の分布をみるとジャワ島から台湾あたりまでとかなり分布域は広く、南方種として扱われるのは当然のことであろう。ただこの様な南方種が近年八重山地方から多く発見されており、中には既に定着したとされる種もかなり見られる。2009 年 11 月に八重山諸島に 15 年ぶりに出かけてきた。その時石垣島でキミスジの確認から、カバマダラ、クロテンシロチョウ、タイワンシロチョウ、シロウラナシジミを撮影した。竹富島ではタイワンヒメシジミを見つけ少しばかり驚いた。マルバネリルマダラは石垣島や西表島、小浜島にも多く、ツマムラサキマダラに至っては奄美諸島や沖縄本島の状態からして、もはや普通種になりさがり時の経過を思い知らされた。その他、多くの種が新たに発見されてきているのは周知の通りである。

この様にどんどんと多くの南方種が定着する勢いであることは最近の特長で、クロマダラソテツシジミについても同様の資格があるはずで、南西諸島から沖縄本島、奄美諸島を越えて鹿児島に渡り、九州のほぼ全県から中国地方、四国、関西、関東方面までと一気に駆け上る生態はまさに驚異的なものと感じている。2007 年に鹿児島県で発見したクロボシセセリは既に南九州で定着化している。

30 年も前にウラナシジミの生態に関心が持たれたことがあった。いつの間にか本土での定着種となり、今はこの種についてとやかく言うものを知らない。今年の観察から耐寒性などはウラナシジミとさほど変わらないと見ており、後は餌となるソテツが安定的に芽吹き供給できるのかが、課題となる様な気がしている。これが維持できれば後は時間の問題であると考えている。

次に本種が本土で定着するにはもう一つ越える重要になると思われる課題について述べてみたい。

ソテツの自生する北限は九州の鹿児島県と宮崎県となっている。それ以外本土の場合、ソテツは全て意図的に植栽されてきたことは歴史が物語っている。樹木としてはあらゆる用途で寺や神社に留まらず学校から公共の施設、公園、庭園、人家まで殆どが観賞用として植えられてきたが、永劫に安定的に供給するには自生地とは異なり少し量が不足していると感じている。また本土の場合、観賞用として植栽されていることで、食痕は管理者にとっては美観を損ね目障りなものになっており、本種が発見される度に、害虫として扱う声も少なくないことである。昨年、今年と沖縄本島と八重山諸島に出かける機会があったが、国道や県道沿いに限らず多くのソテツの植栽地や自生地で見事なまでの食痕を見てきた。やはり美しい景観とは言い難く、その対応策がささやかれているのもうなづける。

現在の所、食咬みによってソテツが枯れてしまった様な事例はまだ出てないようだが、自生地とは異なり、観賞的価値観で持って植栽した多くの県では、文化財として指定されているソテツも多い。これを放置することは難しく、維持するために当然のことだが対策がとられると考えられ、これをクラーする方策を見出さないと、本土での安定した定着は困難になるのではと思っている。

終わりに

これからこの冬も含め、2010 年度の本種に関する動向に今一段と注意し、再発見は無論のことだが、越冬したといえるようなデータが出てくることに期待できればと思っている。

末文になったが、この調査に県内の多くの同好者に携わっていただき、多くの成果をあげていただいた。また県外の同好者にも過去のデータや近況なども教示いただいた。記してお礼申しあげる。

〈スナップ写真〉



夏期型♂



低温期型♂



夏期型♂



低温期型♂



夏期型♀



低温期型♀



夏期型♀



低温期型♀



夏期型交尾個体(♀, ♂)



低温期型交尾(左♀, 右♂)



産卵中



幼虫



食害されたソテツ



ソテツの実の中で蛹化



法林寺の大ソテツ(記念物)

II. ヤクシマルリシジミ *Acytolepis puspae* が山陰側で発見される

本種の発見は 1996 年に瀬戸内海にある屋代島(周防大島町)で最初に発見(小路嘉明・大崎和夫, 1996 [1997])され, 既に 13 年が経過している。その後の調査から, 2006 年度までに屋代島全域と対岸にあたる旧大島町, 旧由宇町, 田布施町, 旧大和町, 平生町, 上関町, 柳井市と平郡島の何れも山陽側の海岸沿い程近い所からの発見に留まっている。本種の食餌はイスノキ以外に多様に渡ることが知られ, 県内の分布はもっと早く広範囲になることが当時から期待されていたが, 同好者ら有志による調査にも関わらず, その牙城は意外に堅いものであった。

2009 年 8 月に下関市でクロマダラソテツシジミの新発見があり, 同好者らによる追跡調査が始まりその過程で 10 月 23 日山陰側の萩市方面に出かけた際, 阿武町にほど近い所から本種の棲息地を発見した。以下順を追って記してみたい。

1. 萩市で発見した所は国道 191 号沿いの日本海に近い位置にあたる。23 日に確認した個体は, 2♂2♀採集で他に数個体を確認している。棲息地であることを決定したのはイスノキが多く植栽していることと, ♀が食樹にまとわりついていたことによるものである。この時は♂♀ともミゾソバやセタカアワダチソウで吸蜜する個体も観察した。なおクロマダラソテツシジミの調査のこともあり, この日は付近には同様の環境が多くあることまで確認し, 後日分布の拡大を調べるために 11 月半ばにかけて更に 6 度ばかり調べることになった。
2. 二回目は須佐の定点調査との合間に, 阿武町に入ったあたりで調査を試みた。萩市での確認地点とほぼ同じような環境で, 1♀の採集と 3♂の飛翔を確認した。♀はイスノキに産卵に訪れたため, ここの棲息地であることが決定づけられた。また須佐での調査も試みたが発見には至らなかった。
3. 三回目は須佐の定点調査も含め, 県境の田万川町から阿武町, 下がって萩市の玉江から三見にかけて調べた。何れもイスノキは植栽されているが発見には至らなかった。
4. 三隅町から長門市方面を調べたところ, 三隅下の海岸から少し入った山裾から本種の♀を捕獲した。イスノキから飛び立ったため, ここで発生したと断定した。
5. 長門市油谷町川尻から下関市豊北町土井ヶ浜の海岸沿いにかけて調査した。イスノキは散発的で本種の痕跡は掴めなかった。
6. 阿武町の新産地を求め須佐に寄った宇田郷に訪れた。前回の調査で目星を付けていたところだが, 発見には至らなかった。当地は棲息の可能性はまだ残されていると考えている。
7. 三隅からの新産地を求め前回の発見地から下がって長門市の対岸になる海岸沿いを訪れた。当地は民家の垣根以外にも, 山裾に多くのイスノキが植栽されていることが分かった。11 月 16 日の調査では発見には至らなかったが, 11 月 23 日の調べからイスノキで産卵する♀を確認した。

8 回の調査からの結論として

山陰側のヤクシマルリシジミの棲息地は現在の所, 発見地の萩市, 阿武町, 長門市三隅町までとなったが, 探索したところ可能性のある地域があることも判明した。これからは下関市に向かって下がった調べと, 阿武町から上がって田万川方面にかけての継続調査が必要だと考えている。また内陸の山間部にかけては山陽側及び山陰側とも充分とは言えず, これからの課題と考えている。

また, 隣県の島根県でも数年前に 1 例の採集記録があると側聞しており, ある程度の分布の拡大は予想できることで, 今後の調査が進むと山陰地方の分布が明らかとなり, その分布拡大の経緯がはっきりと推測されるものと考えている。

食樹イスノキとの関係について

本種の食餌はイスノキがよく知られ, 山陽側においてはイスノキを始めノイバラやテリハノイバラが屋代島の調べから分かっている。また種の餌とする植物は多彩でブナ科からマンサク科, バラ科, マメ科, トウダイグサ科, ミソハギ科, ツツジ科, アオイ科などにも及ぶが, 県内の場合, ホストはイスノキが中心となると考えている。今後の調査はこれを目的に行うことで成果が期待できる。

なおイスノキがホストになるとしたのは, 県内では防風林としてミカン畑や民家の垣根にも植栽されており, 絶えず剪定による手入れがなされ年を通し若葉が芽吹いて, 安定した食樹となっている。

終わりに

この度の調査では, 萩市への侵入ルートを推論するにはデータが乏しいことが明らかとなった。個人的には

福岡県からの進出を考察するのが、山陽側からのものより自然なような気がしている。そのためには近県も含めたより詳しいデータが必要となることで、引き続き要観察種として注目することが課題となる。

〈スナップ写真〉



ヤクシマルリシジミ♂



ヤクシマルリシジミ♂



ヤクシマルリシジミ♀



イスノキに止まるヤクシマルリシジミ♀



防風林として植えられている食樹イスノキ



11月になっても若葉が生育するイスノキ

参考文献

- 後藤和夫, 1999. 山口県下でヤクシマルリシジミの生息を確認. 蝶研フィールド, 14(4): 20-21.
川元 裕, 2009. 山口県でついにクロマダラソテツシジミ発見さる! ちょうしょうゆう便り, (17): 22.
川元 裕, 2010. 山口県内におけるクロマダラソテツシジミの発生状況について. 山口のむし, (9): 49-64.
小坂一章, 2010. 島根県益田市に出現したクロマダラソテツシジミについて. 山口のむし, (9): 67-68.
三宅誠治, 2009. 四国本土及び瀬戸内島嶼部でクロマダラソテツシジミの発生を確認. へりぐろ, (30): 3-9.
小路嘉明・大崎和夫, 1996[1997], 山口県大島(屋代島)でヤクシマルリシジミを採集. ちょうしょう, (9): 2-3.

2008 年瀬戸内地方でのクロマダラソテツジミ発生を俯瞰して

三宅 誠治(岡山県)

Chilades pandava クロマダラソテツジミは、近年になり南西諸島から九州のみならず、四国、中国、近畿、東海から関東地方でも発生したことが確認されている。演者は 2008 年に瀬戸内海で隔たった岡山、香川両県での発生を観察し、そこから得られた幾つかの知見を紹介するとともに、近年の発生状況について考察を行った。

1. 2008 年の瀬戸内地方での発生

演者がこの地域での発生を初めて確認したのは、8 月 22 日の岡山県玉野市築港の日之出公園である。その後、直ちに周辺部を調べたところ、瀬戸内海で隔たった岡山県と香川県で次々に発生を確認することが出来た。また、それぞれの本土側のみならず中間となる瀬戸内海の島嶼部でも発生が確認された。その後、各地での発生情報を調べていたところ、演者の確認よりも早くに、香川県直島町(直島)では 6 月下旬から発生していたことが判明した。これまでの観察例から判断して、この地方での発生の発端となったのは、最も早くに発生を始めた直島と推定される。直島で発生した個体が 7 月下旬に岡山県南部に、またそれよりやや遅れて隣接する島嶼部や香川県に侵入してそれぞれ拡散していったと推測される。ただ、最初の発生と考えられる直島のルーツは、今のところ不明である。

直島の 6 月に発生が確認されたソテツ



岡山県最初の発生確認場所(玉野市 日之出公園)



図 1. 2008 年発生場所



2. 発生地の拡大

発生地で観察されたステージから産卵日(≒母蝶の飛来日)を推算して本種の拡散の様子を推定することを試みた。まず発生地での生育段階と、食痕の状況からその地での最初の発生なのか二回目以降なのかを併せて記録した。それと並行して、気温に依存すると考えられる各時期での成長に必要な日数を飼育下で求めていった。これを組み合わせることによって、観察日と観察されたステージからその場所での産卵日を推算した。この結果を図 2a 及び 2b に示したが、拡散は一定の方向性を持っているのではなく、ほぼランダムに行われながら発生地を広げていることが分かる。

岡山県側では、最初の産卵が行われたと推測された場所から県境を越えるまでの距離とそれに要した日数は、東方向に約 44 km を 45 日で、西方向に約 51 km を 59 日という結果となった。県境を越えた段階で季節は

秋になっており、ソテツの新芽は少なくなっていた。そのため、更なる分布の拡大は困難になったと推測される。このことから、一シーズンをかけて岡山県の南部と香川県沿岸部を制覇したことになる。参考までに、2007年と2008年の鹿児島県と宮崎県の状況を見ると、これも同様に県を縦断するのに一シーズンを要している。但し、これらの拡散の様子は、あくまで一地域の逐次伝搬によるもので、こういった隣接地への拡散以外にも、一気に長距離を移動するフロンティアが存在することも事実で、実際にはこれらが入り乱れて分布拡大が行われていると考えられる。逐次伝搬がランダム方向に行われるという実態に基づくなら、南から北への拡散(北上)は、むしろフロンティアによる功績が大であろう。

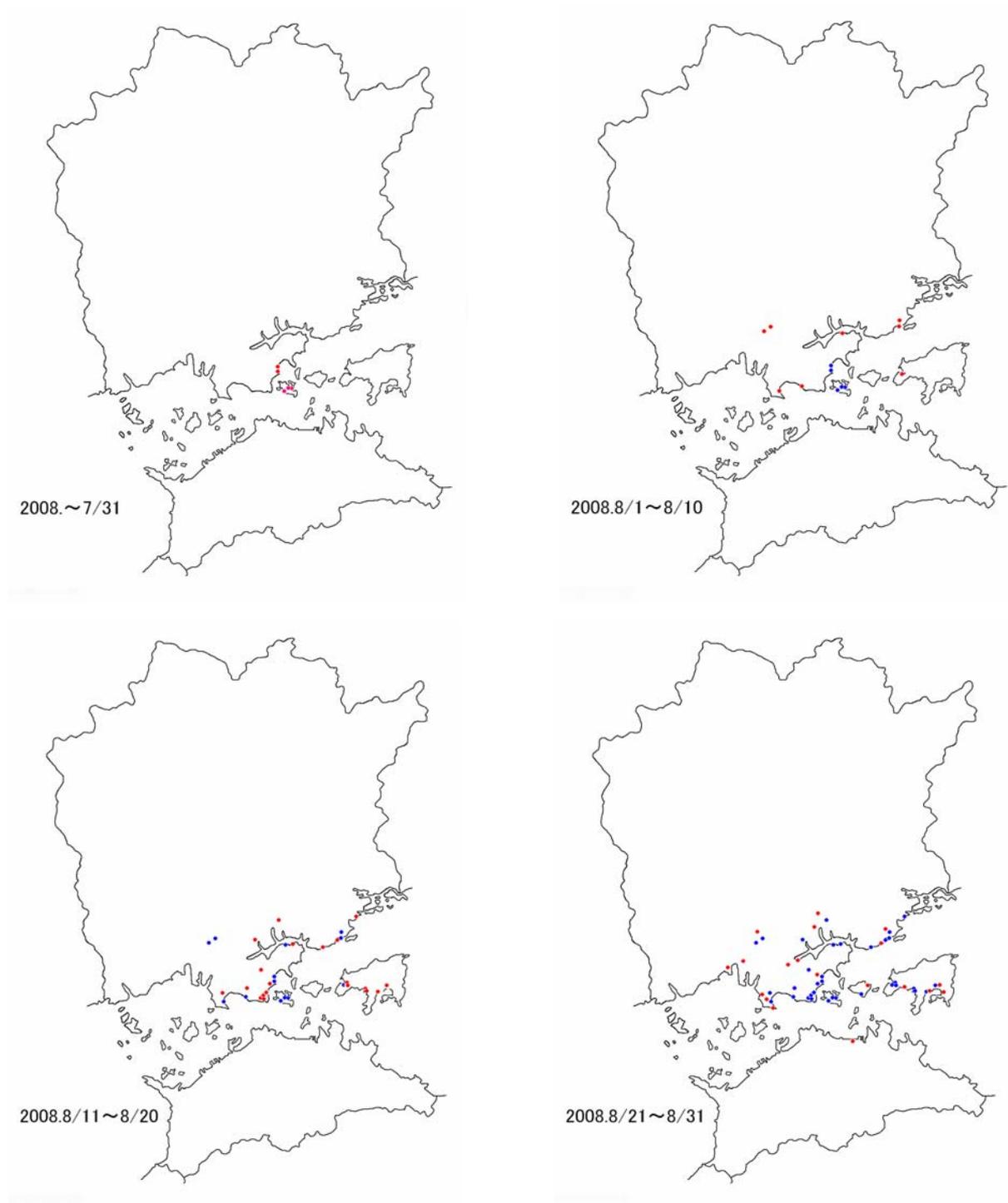


図 2a. 各地の産卵時期
(赤点が新たな産卵場所)

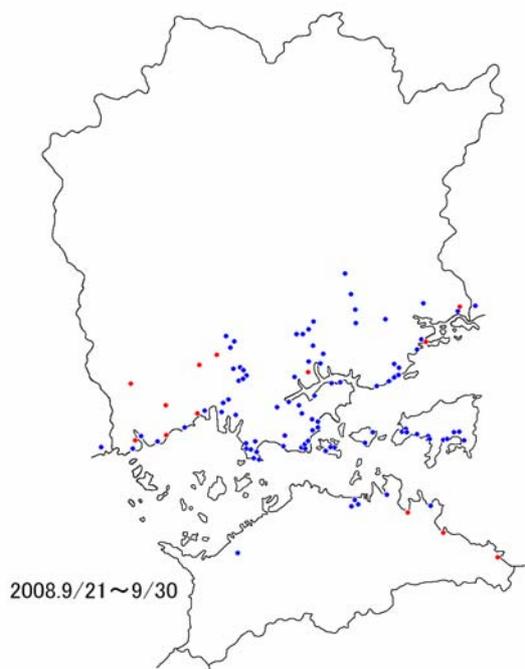
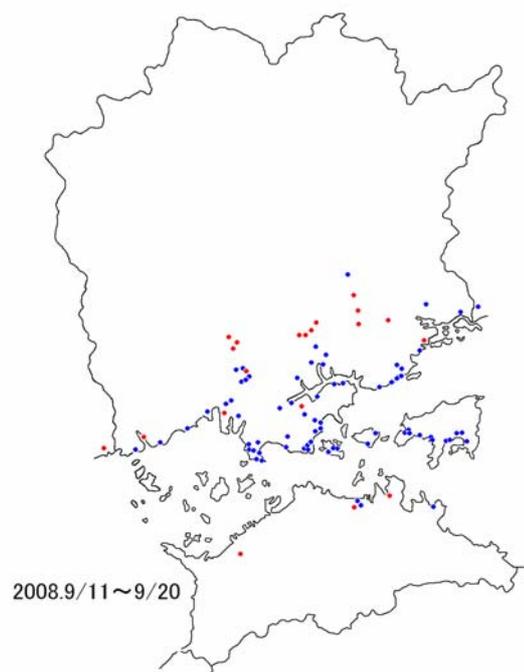
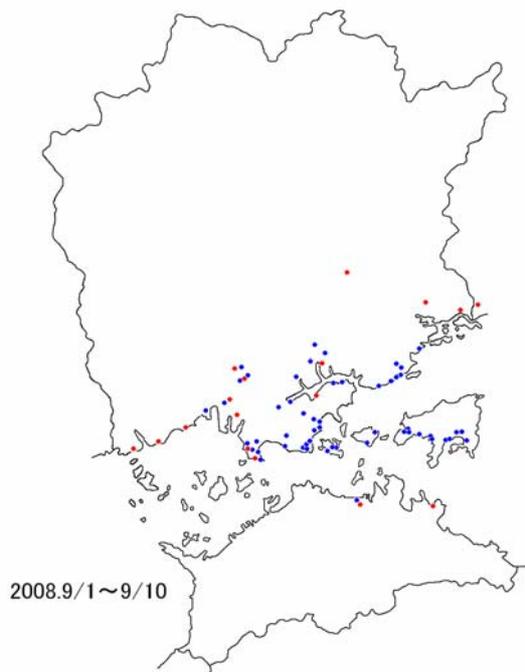


図 2b. 各地の産卵時期
(赤点が新たな産卵場所)

3. 寄生

本種への寄生はこれまで観察例があまり見られないようだが、*Meteorus pulchricornis* ギンケハラボソコマユバチが幼虫に寄生することが確認された。演者は、瀬戸内海の小豆島町蒲生で採集した幼虫から寄生蜂の幼虫が脱出して繭を作るのを確認した。また、香川県東かがわ市引田で小豆島の寄生蜂と同様の繭と死亡した幼虫を観察したが、持ち帰った幼虫からも寄生蜂の幼虫が脱出して繭を作った。また、岡山県備前市日生町でも同様の寄生を観察した。これら3ヶ所で10例の繭からは初冬の内に一頭の寄生蜂が羽化したが、残りの繭からは保管が悪かったせいか羽化するものはなか



香川県小豆郡小豆島町蒲生産

った。ギンケハラボソコマユバチは、様々なチョウ目の幼虫に寄生することが知られており、偶然にクロマダラソテツジミがその対象になったと考えられる。



香川県東かがわ市引田



香川県東かがわ市引田産



岡山県備前市日生町産



Meteorus pulchricornis ギンケハラボソコマユバチ
(神戸大学 前藤薫博士同定)東かがわ市引田産

4. 近年の発生状況

全国的な発生状況を演者が直接に確認したわけではないが、文献やWeb上の情報と、各地の同好者に聞き取りした情報とを整理すると下記のことが見えてくる。1992年に沖縄本島、2001年に与那国島に侵入しているがこれらは一時的な発生に留まり定着には至らなかった。その後、石垣島では2006年の11月には可成りの個体数が確認され、翌2007年の2月にも1♂が確認されて、越冬した可能性がある。また、一旦は観察例が途絶えるが再び5月から確認されるようになり、周辺の竹富島、波照間島、小浜島と勢力を広げていき7月には九州南端に到達している。2007年から2008年にかけて南九州では年を越したが、春までには姿を消している。しかし石垣島では冬から春にかけても継続して観察されており、八重山列島では定着しているか、或いは冬の間も更に南方からの飛来が続いていたと考えられる。また春以降は、ここを起点として北上を繰り返して本土に達したことが伺われる。これらのことから2007年以降本土での発生が続いたことは、八重山列島に本種の前線基地が確保されたことが大きな要因と考えられ、今後もこの拡散は繰り返されると推測される。図3には、2007年以降、その年に発生の確認された地域を赤く示し、また各地の初見日を記入した。この図から分かることは、南西諸島からの北上は島伝いに徐々にやって来るのではなく、九州あたりまでは一気に飛来している可能性がある。それは、2007年、2008年の初見日が石垣島を除くと九州南部が最も早いからである。また、2009年が最も顕著に表れているが、九州南部に到達すると海岸伝いに九州沿岸を北上して中国地方西部に到達したり、四国の沿岸部にも伝搬することが可能で、四国経由で中国地方へ進入している可能性出てくる。しかし、2007年以降3年連続で発生した近畿地方、2008年の中国・四国地方の瀬戸内海沿岸部、2009年の関東地方での発生などは、遠距離飛行による拡散かそれとも人為的なものなのか不明である。

各地での発生を確認した同好者により、この蝶が越冬するか議論されているようだが、越冬を裏付ける記録、即ち早春の記録は、これだけ広い地域で発生したにもかかわらず石垣島以外では見られない。このことから、演者は現段階では国内で越冬している可能性があるのは石垣島だけと考えている。冬の間、温度には耐え

て越冬することが出来ても、その集団の次世代が育つのに必要なソテツの新芽がほとんど無くなるために、発生を継続することが困難という状況が推測される。

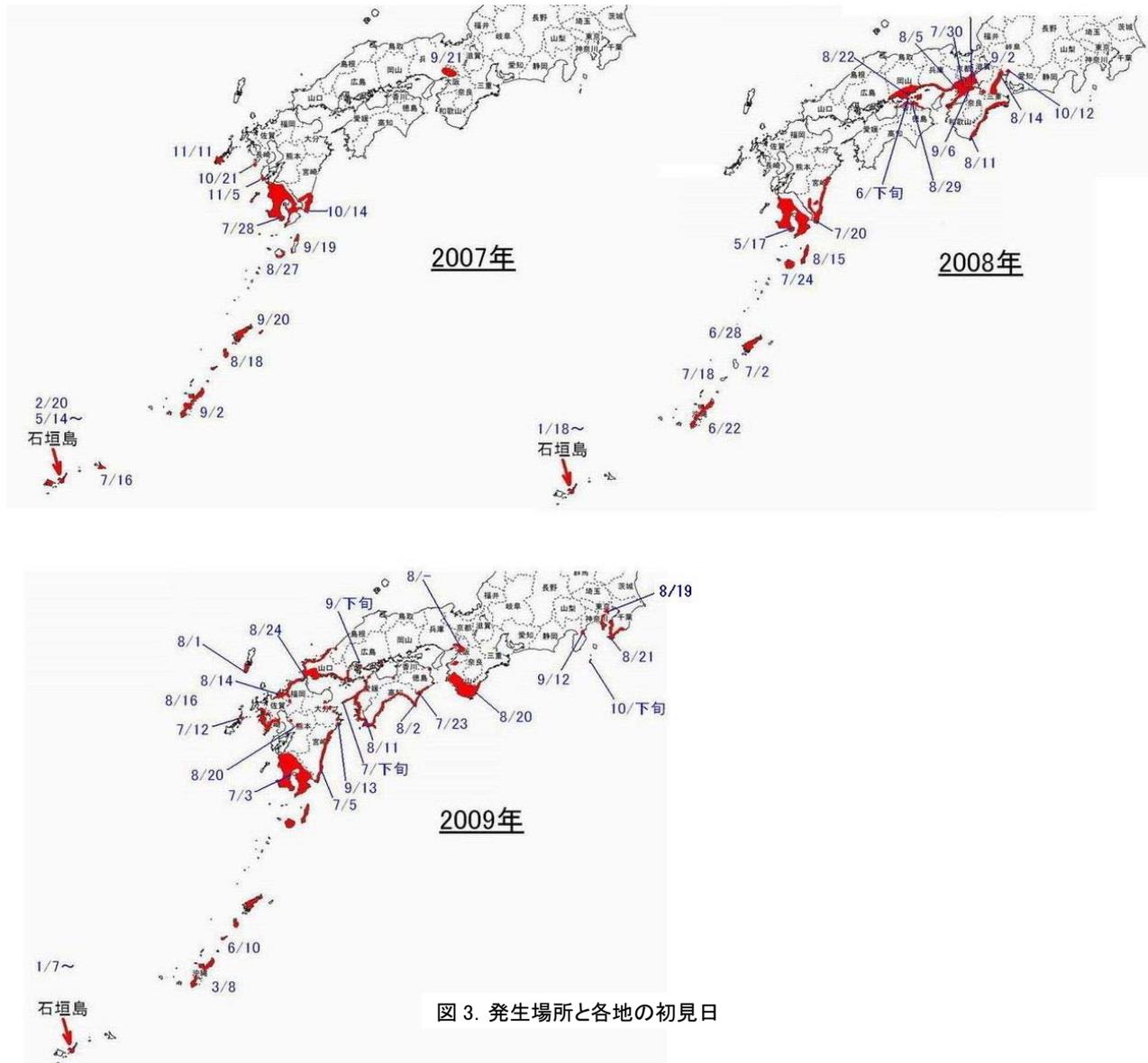


図 3. 発生場所と各地の初見日

5. おわりに

南西諸島や九州南部での発生が本種の自然拡散であることを疑う人は少ないと思われるが、それ以外の地域では、人為によるものかどうか未だ明確ではない。しかし、演者はそのこと自体にはあまりこだわる必要を感じていない。と言うのは、これまで発生が確認された場所では少なくとも餌となるソテツが栽培されており、新芽が出る時期に母蝶が飛来すれば発生できることが証明された。本種のような拡散能力の高い種が、遙か南方より毎年のように九州、或いは四国まで飛来して大発生するとしたら、それが本州に到達することが困難と考える方がむしろ無理がある。ウラナミシジミと同じようなものと理解するのが一番妥当だろう。

今回の発表を行うに際して、全国の発生状況を収集するために多くの同好者の協力を頂いた。特に、2009年の状況に関しては、殆どすべての情報が発表前の現在進行形のものであった。言うなればこの講演は同好者のネットワークの成果と言えるものである。また、Web 上の情報も引用した。これについては正式発表されたものではないため、誤りも含まれていた可能性もある事をお断りしておく。最後に、すべての方のお名前を挙げることは出来ないが、協力頂いた多くの仲間達に感謝したい。

平安京近郊のギフチョウ——記録の収集と生息域の推定

渡辺 一雄(広島県)

京の都は年間 4 千万人が世界中から訪れ、その地名や景観の知名度は群を抜く。平安京から徒歩で日帰り可能な地域はかつてギフチョウが豊かであった。ただその実態はあまり知られないまま、1995 年、京都府はギフチョウを「地域を定めない天然記念物」に指定し、「既知産地での無許可採集」をご法度とした。この時点でもう多くの既知産地では原因不明のままギフチョウは姿を消していたのだが、残っていたわずかな産地も近年急速に縮小しほぼ壊滅状態となった。

一方、かつての発見者、昆虫少年たちの高齢化が加速し、探索活動は萎縮し、採集記録は消えた。このままでは古い記録(実は地名)を残したまま京のギフチョウはすべてが“化石”と化す流れにある。

演者は、「八鹿ノート」(後述)を核に京のギフチョウの古記録、標本、採集経験談を収集し、近年進んだギフチョウの個体群動態への理解(渡辺, 2008)を踏まえて京におけるギフチョウの本来の生息域の推定を試みた。

一方、京の都は 1000 年以上に渡る土地風土の変化の歴史を史書や日記文学から克明にたどることができる世界唯一の都市でもある。主要食草ミヤコアオイとヒメカンアオイの京都盆地における分布拡散、繁茂条件の歴史的变化の考察を加え、虫屋以外の京に興味を抱くすべての人々が『ギフチョウの風土』としての京を楽しむことも念頭に置いた。

1. 発端——「八鹿(やしか)ノート」の発見

昭和 42 年(1967 年)3 月末、私は一冊の古びたノート(八鹿ノート)を手にした。太平洋戦争の終結後、ギフチョウを研究材料に選び、休眠と変態のシグナルとなる昆虫ホルモンの研究を開始した京大の市川衛教授の研究チームメンバー、八鹿寛二さん(後に大阪大学教授、1920-2003)が作ったものである。昭和 27 年の嵐山/嵯峨野、比叡山麓、東山妙法院/阿弥陀が峰、将軍塚などのカンアオイとギフチョウの産出状況の克明な地図と解説文があり、私は彼に生前その所持を話し公表の許可を得たが、以後また 30 年が経過した。

2. ギフチョウ“産地”とは—— 飛翔散逸の防止と生殖

京都盆地のギフチョウをはじめて記録したのは柴谷篤弘(1939)で、記録の全体像は松本(1977)の報文がよく纏まっている。すなわち京都盆地を取り囲む山裾のほぼ全域に点々とギフチョウ“産地”があった。

飛ぶ生物の生存上の最大脅威は「飛翔に伴う個体の散逸」である。摂食、交尾、産卵が保障されなくなるからである。したがって、ギフチョウが生き続けるにはまず相互交雑個体群(メタ個体群)の散逸防止が大前提で、次に♂と♀の遭遇と交尾、そして♀の産卵行動が保障され、その上で幼生期から羽化までの長い生活の安定が必要である。

ギフチョウの♂個体は、山頂を中心に共通の集合拠点をいくつか作りながら回帰性の周回飛翔を行っている。これにより散逸を免れつつ個体密度を濃縮し、集合拠点で♂同士が遭遇すると追飛により適度の分散を実現し、山域の広い範囲に♀待機の網を張り廻らせて遭遇/交尾効率を高めている。広島市の調査地では♂の行動圏は 4 つのピークを含む直径約 500m の中にあり内部で交尾から産卵まで営まれていた。

一方、♀個体は食草が豊富で個体数が多い発生地では羽化時にその場で交尾・産卵するが、♂と出会えなかった場合には先の♂の集合拠点へと飛んで遭遇を果たす(渡辺, 2008 に総括)。

成虫の飛翔は、地形/景観、食草密度、気象条件、同種/異種個体との遭遇などの環境要因と、個体側の環境受容の飛翔行動への変換によって決まる。ゆえに個体群の行動圏は年々変化する。また産地は複数のメタ個体群の重なり合いでできている。各メタ個体群間の性格や量もさまざまで、異なるメタ個体群由来の交雑も一定頻度あるに違いない。

ギフチョウ“産地”とはこれらを包括した概念である。これを考慮して、以下、記録を手掛かりにギフチョウ本来の生息域の把握を試みた。

3. 「京の都」のギフチョウ記録と推測される生息域

(1) 嵐山小倉山麓から嵯峨野・宇多野——愛宕山麓の里山地帯

- ①小倉山山麓, ②嵯峨院(大覚寺)と北嵯峨から観空寺谷, ③宇多野から花園——御室川・仁和寺方面
- (2)愛宕山から北山前衛の低山地帯——清滝川水系と加茂川水系
 - ①愛宕山本体から清滝川流域, ②嵯峨野, 宇多野, 衣笠の後背山地——京見峠, 杉坂, 氷室方面, ③鞍馬・貴船——加茂川水系の源流域
- (3)京都西山——松尾から大枝, 老ノ坂峠, 小塩山, ポンポン山
- (4)岩倉盆地から比叡山, 修学院離宮——高野川水系の京への開口
- (5)東山三十六峰
 - ①蹴上から北(大文字山と北白川瓜生山), ②蹴上の南(妙法院, 將軍塚から阿弥陀が峰)③泉涌寺, 東福寺から泉山を経て伏見稲荷, 伏見山

4. 地質, 地形, 地誌から見えてくること(まとめ)

京都盆地は三囲を山に囲まれ南へなだらかに標高を下げて巨大池沼, 巨椋池に開放する縦長長方形の盆地である。北辺を区切る山裾(仁和寺金堂, 上鴨神社, 曼殊院)は見事に標高 100m 線に一致し, 嵐山, 嵯峨野から北山, 東山の有名寺院群はおおむね標高 100m から 70m の山裾を縁どる。50m 線は御所を横切り京都駅は山裾から 8km で標高 26m, 喉首の大山崎の淀川川床はもう 10m である。縄文海進最盛期(約 5300 年前)には高槻市まで海面下で汀線は大山崎付近にあり京都盆地には海は入っていない。

平安京は北を正面に一辺 12km の見事な正四角形を形作る比叡山(848m), 愛宕山(924m), 小塩山(642m), 醍醐高塚山(485m)の正正面に置かれた。このおおむね標高 100m 線以上は丹波層群の古い岩塊で, ギフチョウはここに生えるミヤコアオイを主食草に生息する。

主たる生息環境は食草のカンアオイ類がある溪谷斜面から尾根までの起伏のある山間部と適度な人手が加わった山脚から平地移行部である。後者ではときに多産する半面, 人手(下刈や落葉掻き)から放棄されると数年でいなくなる。この意味で 794 年の平安奠都以来千年以上続く山裾の山荘, 離宮, 寺院の営みと周辺の里山利用は食草の増勢を促し, 1950 年ごろまで京の都を世界で類をみない優れたギフチョウ産地となし続けたと考えられる。

ここでいくつか考えたい論点がある。それは, ①鴨川と高野川は沖積部にギフチョウ環境を作らなかったか, ②嵯峨野, 宇多野がギフチョウの大産地であり続けたとすれば, それは桂川, 賀茂川の氾濫原が及ばなかったからだけか, ③保津峡はギフチョウ・メタ個体群を分断したかなどである。

東山の蹴上(三条通り)以南のギフチョウにはいまひとつ大課題がある。それは「大阪層群とヒメカンアオイをめぐる問題」であり, 蹴上から伏見までの記録を何とか発掘して議論したい。

5. 未来に向けていまできること——関心の喚起, 林床の整備, 放蝶の自粛

- (1)現状——尋常でないカンアオイ類の衰亡
- (2)採集について——京ではもはや許されない

採集/目撃記録や談話の収集, 京の景観復元研究成果と資料/文学の発掘はまだ不十分で今後多くのご批判, ご教示を期待している。

鳥取県倉吉市の南方系鱗翅目の動向について

田村 昭夫(鳥取県)

鳥取県で確認されている南方系鱗翅目 9 種類(ナガサキアゲハ, ムラサキツバメ, イシガケチョウ, ツマグロヒョウモン, クロコノマチョウ, ウスイロコノマチョウ, クロメンガタズメ, イチジクヒトリモドキ, ハマオモトヨトウ)のうち ハマオモトヨトウを除く 8 種類について 1979 年～2008 年までの 30 年間の平均気温と冬期(12 月～2 月)の平均気温と“ゆらぎあ”(鳥取昆虫同好会機関誌)をもとに鳥取県の定着状況を発表した。南方系鱗翅目の食餌植物は以前から普遍的に分布していたことから, ナガサキアゲハ, イシガケチョウ, ツマグロヒョウモン, クロコノマチョウ が定着したのは, 気温上昇によるところが多い。

日本鱗翅学会中国支部の体制と連絡先

(2010-2012 年度)

連絡先住所: 〒690-8504 松江市西川津町 1060 島根大学生物資源科学部星川研究室気付

支部長: 淀江賢一郎 〒690-0862 島根県松江市比津が丘 2-1-7

TEL(0852)26-0186 E-mail: yodoe@mable.ne.jp

事務局幹事: 星川和夫 〒690-8504 松江市西川津町 1060 7 島根大学生物資源科学部

TEL(0852)32-6527 E-mail: hosikawa@life.shimane-u.ac.jp

会計: 野口祐美子 〒690-8504 松江市西川津町 1060 島根大学生物資源科学部星川研究室気付

各県幹事

山口県幹事: 中西 淳 〒759-0207 宇部市大字際波 1947-3

TEL(0836)41-6327 E-mail: yhj02110@nifty.ne.jp

広島県幹事: 神垣健司 〒737-0113 呉市広横路 4-4-32

TEL(0823)74-2680 E-mail: quercus77@mail.goo.ne.jp

岡山県幹事: 若槻匡志 〒704-8183 岡山市東区西大寺松崎 248-69

TEL(086)943-2262 E-mail: ja4vrv@ba2.so-net.ne.jp

鳥取県幹事: 田村昭夫 〒682-0881 倉吉市宮川町 2-74

TEL(0858)22-7707 E-mail: tanbaya@lime.ocn.ne.jp

中国支部選出の理事

本田計一: 〒739-8521 広島県東広島市鏡山 1-7-1 広島大学総合科学部自然環境研究講座

TEL(082)424-6501 E-mail: honce@hiroshima-u.ac.jp

中国支部選出の評議員

淀江賢一郎: 〒690-0862 島根県松江市比津が丘 2-1-7

TEL(0852)26-0186 E-mail: yodoe@mable.ne.jp

三宅誠治: 〒706-0131 岡山県玉野市東紅陽台 2-19-192

TEL(0863)71-1965 E-mail: miya@tamano.or.jp

神垣健司: 〒737-0113 広島県呉市広横路 4-4-32

TEL(0823)74-2680 E-mail: quercus77@mail.goo.ne.jp

自然保護委員会

中国地区委員長:

伊藤國彦(〒719-1112 岡山県総社市窪木 111 岡山県立大学 E-mail: kunihikoito@live.jp)

委員: 後藤和夫(〒759-0207 山口県宇部市厚南 7 区平和町 E-mail: kazumi-kgh46@h6.dion.ne.jp)

渡辺一雄(〒734-0005 広島県広島市南区翠 5-9-20 E-mail: gifutoga@hicat.ne.jp)

田村昭夫(〒682-0881 鳥取県倉吉市宮川町 2-74 E-mail: tanbaya@lime.ocn.ne.jp)

淀江賢一郎(〒690-0862 島根県松江市比津が丘 2-1-7 E-mail: yodoe@mable.ne.jp)

* 自然保護委員会は、支部組織ではなく本部直轄ですが、関係が深いので掲載しました。

* 中国支部への事務連絡・問合わせは、郵便で上記、島根大学星川研究室気付でお願いします。

ご挨拶(自己紹介を兼ねて)

田村昭夫: 鳥取県支部の幹事を務めています。チョウもガも集めていますが、ガはいつまでたってもビギナーです。今は東大山周辺でガ類調査をしています。鳥取県のガ類リストを作成中で、完成したら発表したいと思います。その他に、鳥取県における南方系鱗翅目の北上や東アジアとの関係に関心を寄せています。行ってみたい採集地は、韓国・中国・ロシアですが、東南アジアにも興味があります。

若槻匡志: 私の昆虫採集歴は、中学時代にルリタテハと出会って蝶の魅力にとりつかれ、高校では生物クラブに入部して野山を歩き回りました。社会人となってからは、もっぱらストレス解消が第一目的になり、この趣味のおかげで、何度か仕事の上での私なりの苦境も乗り越えられたように思っています。退職してからは沖縄やグアム島、モンゴルなどを訪れて蝶を採集してきました。最近は旅行も減りましたが虫をみる情熱はまだ失っていないと感じています。消滅しないうちに微力ながら会のお手伝いをさせていただきます。

中西 淳: 蛾を始めてまだ5年という短いキャリアです。シーズン中は数分あれば組み立て可能なバッテリー式灯火システムを車載して走行し、これはと思われる地点に至れば即その場で灯火を始める、を繰り返しています。まだ専門領域が定まらないのですが、最近、実体顕微鏡を覗きながら展翅する楽しさを知り、この調子でいけばマイクロ系の蛾類で落ち着くような気がしています。諸先輩方のアドバイスをいただきながら、蛾類を中心とする鱗翅目に対する見識を深め、鱗翅学会の発展のため、少しでもお手伝いできればと思っています。

星川和夫: ここ10年間は三瓶山のウスイロヒョウモンモドキの保全で毎年忙しい夏を送っています。鱗翅類は小学生の時からのおつきあいですが、ショウジョウバエやら TENTUM シヤら、いろいろ浮気してきましたので(どれが浮気なのか本人もわかりません)、そう詳しいわけではありません。この度は、県幹事と事務局の御仕事を引き受けさせていただきました。私、事務というのは大の苦手として、支部長はじめ皆様に御迷惑をおかけすることは必至です。皆様の御叱正を宜しく願いいたします。

野口祐美子: はじめまして。島根大学の昆虫研でホシミスジの休眠を調べ始めた野口です。まだ研究し始めたばかりですので、いろいろと教えていただければ幸いです。ホシミスジはとても綺麗なチョウなので、野外で出会うことを楽しみにしています。この度は会計事務を担当させていただくことになりました。至らぬ点多々あるとは思いますが、よろしく願いいたします。

神垣健司: 最近、広島県南部のキマダラモドキが分布を拡大していることに興味を持っています。なぜ分布域を拡大しているのかを、生活史を含めて調査しています。その他、島嶼部の蝶相(特にウラナミジャノメ)なども、機会を見つけては調査を継続しています。10年ほど前から、「里山を歩こう」というメールマガジンを配信しています。現在の読者数は約6000人、フィールドで撮影したあらゆる動植物を画像付きで紹介しています。ここ数年、特にほ乳類と猛禽類(特にフクロウ類)などに力が入っていて、必然的に蝶に割く時間が少なくなっています。

三宅誠治: 虫なら何でも好きですが、中でもレピは最愛です。冬に小枝に産まれた卵を見つけると感激しますし、新緑の中の幼虫も感動ものです。勿論花に戯れる蝶には魅了されますし、水銀灯の下で幕に集まる蛾には狂喜乱舞です。野山を見ればそこにどんな虫がいるのか気になって、気になったら調べてみたい。年中、何かの虫を追っかけています(願望も込めて)。あまり遠出することはありませんが、身近でテーマを見つけては自分なりに納得できるまで苦闘しています。

淀江賢一郎: 夢中で蝶を追いかけているうちあつというまに人生の折り返し点を過ぎました。いまは長い間楽しませてもらったお返しを蝶と蝶界のためにできることがあればと思っています。チベット、ニューギニア、アマゾンなど行ってみたいところもたくさん残っていますのであと数年は現役で頑張るつもりです。50年近くかけて大量に収集した標本と文献を活用することも考えなくては・・・(これは皆さん共通の悩み?)。前支部長の後藤さんのような猛烈なエネルギーはありませんが、気楽に、そして少しは知的な雰囲気を楽しめる会にしていきたいので、どうぞよろしくお願いを申しあげます。

沖縄本島の“蝶”と“蜻蛉”撮影記

後藤 和夫

2008年度から思い出の深い場所を再訪することで、奄美諸島の蝶の撮影記を紹介させていただいた。当然県内と異なり、また別の経験をする中で、自身の向上につながるため若手の会員さんには、多忙な中、仕事をやり繰りし、年に一度程度の遠征をする必要性についても話してきた。

2009年も半ばを過ぎて盆も明けた頃、若手のトンボ屋でもある伴一利氏から、9月の秋分の日を挟んだ連休に、何とか仕事の都合をつけることができたとの一報が入った。彼にとっては鹿児島以来2年ぶりの待望な遠出になる。若手に旅行を薦めていたこと、その様な時には何とかするからと話していたこともあり、考えた結果、沖縄本島にトンボを主目的に急遽出かける計画を立てた。

本島については15年以上も前には何度と無く経験しており、二泊三日を最も効果的に活用する方法をとったのは述べるまでもないが、希望する航空券とレンタカーをセットのパックツアーで、宿泊地も考えていた場所が確保できた。

ここで少しお断りしておくが、鱗翅学会の会員であれば蝶や蛾について書くことが本来求められているのでは？と思うが、その様な考えは少し古いようで、必要と思えばこの様な撮影記にも載せて、広く昆虫を紹介するスタイルでよいのではと感じ、トンボも付け加えさせていただいた。

これから沖縄本島北部で見てきた蝶類と蜻蛉について少し紹介してみたい。

第一日目 2009年9月22日(火)晴れ 山口(自宅)ー福岡ー那覇ー沖縄本島北部へ

自宅を6時30分に出発、この撮影旅行に同伴する平生町の伴氏と新幹線の厚狭駅で落ち合い博多へ。福岡空港発8:35(ANA)で那覇空港には10:10頃到着。早速レンタカー借用の手続きを行ったが、利用者があまりにも多く出発が予定より30分もオーバーしてしまった。市内を抜けて沖縄自動車に入ってから沖縄モードになってきたが、許田ICに近づくにつれ、やはり連休の中日、だいぶ混雑してきたが約10分の停滞で、R58号に出た。ここから名護市中心部を抜けて昼食をするために沖縄ソバの専門店に立ち寄った。途中オオシマゼミの鳴き声が車中でも聞こえてきて、国道の中央分離帯に植栽されているソテツには小さなチョウがまとわりつき、新葉がことごとく枯れたようになっていたことで、この8月に山口県でも発見され、話題を提供しているクロマダラソテツジミであることは直ぐに分かった。本種はこの旅行中どこにでも見られた。

食後13時30分頃から最初の目的地、大宜味村饒波に向かった。途中立ち寄ったコンビニでは空にトンボが舞っていた。途端に伴氏の目が輝き、そのトンボを見事に仕留めた。この旅行での捕獲第1号はコモンヒメハネビロトンボで、最近沖縄本島から久米島では定着化するようになった種だった。さすがに買い物など後回しに確実に押さえることで、この遠征での彼の意気込みを感じた。

ここから目的地までは近く、集落地に入るなりハイビスカス並木に、ナガサキアゲハの白色の目立つ個体が視界に入った。やはり大きさといい本土とはまったく異なった色調で目を奪う。シロオビアゲハやモンキアゲハも適度に混じり、ツマベニチョウも時折横切った。

それらを流しながら集落地を外れた奥地に向かい、川沿いの樹木に囲まれて程よく開けたところで、しばらく腰を構えて探索をすることにした。ハブ予防に持参した長靴に履き替え、溪流沿いを散策すると、ベニトンボやタイリクショウジョウトンボ、オオシオカラトンボを確認した。川を渡るため置き石のあるところは流れが弱くなってタイワンウチワヤンマが枯れ枝に止まり、時折ギンヤンマが飛んできた。土手の草むらを歩くと、ハラボトトンボが点々と見られ、何やら分からない小さなトンボが飛び立った。止まるのを待ち近づき撮影した後、伴氏に確認してもらおうとヒメトンボの♀と教えられたが、枯れ草と調和し保護色になって、注意しなければ見過ごすところであった。

トンボばかりでは面目が立たないため、山道沿いに移動したところチョウの撮影をしている方に出会った。目的はコノハチョウで、樹木に止まり吸汁しているところを熱心に撮っておられた。フタオチョウのことも聞いてみたところ、少ないが見られると話されたが邪魔しないように直ぐに離れて、道沿いに咲くセンダングサを見渡したが、リュウキュウアサギマダラやインシガケチョウなどが吸蜜に来ていた。またクロアゲハやオキナワカラサアゲハも撮影しながら行ったり来たりを繰り返したところ、ルリタテハの大きな個体を見つけ、更にスミナガシの新鮮そのものまで現れたため撮影したが、深い青紫色がかかった個体は本土と違い南方を連想させるものだった。

16時00分頃から更に北部の国頭村与那に移動し、集落地から与那川沿いを奥地に向かって探索することにした。さすがに飛び回るトンボは少ないものの、よく見ると木漏れ日の当たる枯れ枝などに止まるオオハラビロトンボを撮影した。またアカネ属を見つけたのでシャッターを切ったが、後からタイリクアキアカネと分かった。伴氏によるとこの様な南でも飛来する例があるとのことだが、沖縄では少ない事例ではないかと思った。そのほか、ハネビロトンボやオオシオカラトンボ、ベニトンボは確認したが、彼が目的の一つにしていたリュウキュウギンヤンマの発見はなかった。

ここでのチョウ類はタテハモドキやアオタテハモドキを始め、ナガサキアゲハとツマベニチョウは17時ごろでも飛び回っていた。17時30分を過ぎ一日目を終えることにして、二泊する様にした名護の仲尾次にある宿所に向かった。伴氏の初日にしては上出来だったようで、その日の夕食も盛り上がり、食後は捕獲品の整理も黙々とこなして21時30分頃からは、一時間以上も宿所から広場の周りの灯りを巡回したが、オオシマゼミの羽化したての成虫は幻想的で大変美しいものだった。

第二日目 2009年9月23日(水)晴れ 沖縄本島北部 与那・饒波・大宜味・塩屋

宿を8時過ぎに出発、昨日寄った北部の与那に向かった。途中辺土名にあるコンビニに昼食と飲料水を確保するため立ち寄った。ここで人に踏まれたか、地面に落ちて既に死んでいるサツマニシキを回収した。さほど破損がひどくなかったことで、標本にと三角紙に包んだ。本土産とは異なり明るい色彩の美麗蛾で、前日のコモンといいコンビニの周りでは、虫が苦もなく獲られるようである。

昨日のところから、更に与那川沿いを奥へと進んだ。早速リュウキュウハグロトンボの青みの強い♂があちこちに休んでいた。近づくと敏感で直ぐに飛び立つが、それらを粘って撮影した。ここではリュウキュウアブラゼミの鳴き声も聞こえてきた。チョウについては昨日と大きく変わることはなかった。一時間の探索の後、奥へと移動したが、リュウキュウハグロトンボに加え、リュウキュウリモントンボやアカナガイトトンボ目立ってきた。ただここらは薄暗くなった山道沿いの至る所に、ハブ注意の看板が立てられていた。時期とタイミングが合えば簡単に遭遇するのではと思えるようなところを歩いたが、めぼしいものには出くわさなかった。ただ勇気を持ってシダに覆われた沢に入れば、大物もいるような雰囲気だったが、ハブに出くわす危険も高まるため、姿も確認できないのにそこまでする必要がないと諦めた。昼までは早く、溪流沿いに座って昼食を済ませた。一見山口県を思わすような雰囲気だが、辺りの植物相は異なり亜熱帯のものだった。

昼からは饒波まで戻り、ここから山奥の大宜味を越えて東村との境界辺りまで足を伸ばした。この山道沿いでリュウキュウギンヤンマが低空飛行するのに出あった。目的の大物が現れ伴氏は真剣な眼差しに変わり、



与那川にて(伴 一利氏)



宿所より羽地内海を望む(筆者)

メッシュネット一振り。うなりと共に見事捕獲に成功した。ギンヤンマと違い、胴体部はかなり長く、一回りも大きなヤンマである。思わず笑みのこぼれた顔に彼の嬉しさを感じることができた。この道路沿いにため池が見つかり益々期待を抱かせ、探索したところリュウキュウギンヤンマの早から、オキナワチョウトンボ、ハネビロトンボ、コモンヒメハネビロトンボ、ベニトンボが岸の周りに結構見られた。しかしさすがの彼もしばらくは奥に入るのをためらっていたが、意を決し岸沿いを歩いて中まで入り込んだが、その努力が報われてコシ

ブトトンボも追加した。私もツمامラサキマダラ以外めぼしいものが見あたらず彼の後を追ったが、いかにも何か出そうで気持ちの良いため池とはいえなかった。

この道路沿いの脇道ではオオキイロトンボも確認したが、空高くどうすることもできなかった。また何でもない様な水溜まり場ではヒメイトンボの♂を撮影したが、水場さえあれば何か発生していると感じた。チョウについては見つけたフタオチョウは破損し写真にはならないし、ナガサキアゲハやツマベニチョウもハイビスカスに吸蜜にくるものの、長く止まることなく思うようなシャッターチャンスは訪れなかった。

結局この日はトンボの撮影に集中することになり、帰り間に饒波近くの川沿いで伴氏が見つけたコフキヒメイトンボの居るところで、非常に小さな本種を撮影した。ここではヒメイトンボまで発見したが、大変酷似しており私には区別はできなかった。やはりこのような小さなンボを探し出すことは、さすがトンボ屋だと感じ入った。またアカナガイトンボの♀も発生しており、時期としては遅いオキナワオジロサナエまで撮影した彼にとっては、それなりに満足した二日目となったようだ。勿論夜の乾杯も成果と無事を祝ってのことだった。

第三日目 2009年9月24日(木)晴れ 饒波—真喜屋ダム—名瀬—那覇—福岡空港—自宅へ

最終日も8時過ぎに宿をでて直ぐ、ナンバンサイカチにまわりつくウスキチョウを発見、近づいたがいずれも破損個体で撮影は諦めた。それから今回三度目となる饒波に向かったが、途中で昼食と飲料水を確保したのは言うまでもない。集落地に入るとハイビスカスの花に時間帯が良かったのか、かなりのナガサキアゲハが飛んできた。伴氏も一頭だけとは採集したが、やはり初めて見る白色の発達した♀に感心していた。

この期間中肝心なチョウについては思うような撮影ができてないことで、面目を保つため少しその気になってコノハチョウとフタオチョウを探すことにした。まずコノハチョウが川沿いの樹木に下向きに止まりじっとしているのが見つかった。川に降りるには高低差が大きく諦め、450mmの望遠で何度となくシャッターを切った。裏の斑紋から♀であることと、ほとんど破損も無いことで構えた手に力も入ったが、前日まで撮影した個体は鮮度も悪く今一だったので一息ついた。

次にフタオチョウになるが、時間の経過と共に白いチョウが飛び立ち川沿いに繁る葉表に止まった。直ぐに♂であることは分かった。距離があり角度も少し悪かったが、動く気配が無いのでこれも望遠で何枚か撮影した。鮮度についてはほぼ満足できるものだった。そこから山道にでて歩き始めたら伴氏から声がかかった。まぎれもないフタオチョウの♀が木の幹にやや斜めで下向き止まっていた。距離とも申し分なくじっくりと構えたが、撮り終えても微動だしなかった。この様にじっくりされては叩きだしでもしない限り見つけることは困難で、♂とは異なり要領を得ないと発見には経験が必要となるチョウである。昼まで周辺を探索したが、新たなトンボやチョウの追加はならず、最後の目的地真喜屋ダムへ移動した。

ここはダムができるまでは昆虫類の多いところだったと聞かすが、以前に比べかなり様相が変わっていた。狙いはトンボになるため、湖畔の終点辺りで探索を開始した。伴氏はダム湖内に向かって進み、私は山道周回部を探してみた。相変わらずオオシマゼミは多くクロイワツクツクと共に鳴いていた。チョウについてはベンモンアゲハとシロオビアゲハが盛んに飛び回っていた。その内センダングサに止ったイワカワシジミの♀を発見した。やや破損していたが、初日に饒波で見たものよりましだと撮影することにした。後はツمامラサキマダラがたむろしており、それらを追って奥の支流まで歩いてみた。溪流には、必ずリュウキュウハグロンボとアカナガイトンボが遊んでおり、オオシオカラトンボの♀の黒色紋がかなり発達した個体が確認できた。

15時30分頃に合流し二人で荒れた畑地周辺を散策し、オオハラビロトンボの♂♀を追加した。彼が目的としていたオオキイロトンボについては発見できず、湖の周りはタイワンウチワヤンマとタイリクショウジョウトンボを圧倒的な数、確認したとのことだった。

16時に近づいたところでこの旅行を終了することにし、ダム湖堰堤の公園に向かい川水で手足顔を洗い、帰り支度を済ませた。公園の中を流れる小さな側溝には、ここでもアカナガイトンボがたむろしており、結局トンボで始まりトンボで終わったが、これまでとはまた違った体験も、充実した遠征となった。

16時から名護を経由し沖縄自動車道にて那覇空港へ。レンタカーを返却し18時前には空港に到着した。空港では職場の同僚にと多くの土産を買う彼の姿があったが、私などとは違いこれもよく分かる様な気がしたが、何も買わないのは後々に響くかと思ひ、私も家族用に特産のお菓子を買求めた。その後は、那覇発19:15(ANA)で福岡空港に20:50頃到着。地下鉄で博多駅に向かい博多から新幹線に乗りし22:27厚狭着。伴氏とはここで別れ23時前には無事帰宅した。

この遠征はトンボを主体にすることは始めに述べた通りである。結果その様になったが、これもまた大変役立つ経験であった。彼とは親子ほどの年の差があるが、専門の分野も違うことで相互にプラスになったのではと感じている。話によると初めての沖縄にしては充分な成果だった様子で、今回確認できなかった種につ

いては、また時期を改め時間を作りチャレンジすることでよいと思う。まだ若いし、このような機会は地道に頑張っておればいくらでもあると彼には話しておいた。

末文になったが、天候にも恵まれたことで快適な撮影旅行をすることができた。この旅行に同伴し色々お世話になった伴 一利氏に感謝する。



ナミエシロチョウ♀



ツマベニチョウ♂



ツمامラサキマダラ♀



スミナガシ♀



コノハチョウ♀



フタオチョウ♀



コフキヒメイトトンボ♂



アカナガイトトンボ♂



リュウキュウハグロトンボ♂



オキナワチョウトンボ♂



コシブトンボ♀



オオハラビロトンボ♂

参考文献

伴 一利・後藤和夫, 2010. 沖縄及び八重山で採集したトンボ. 山口のむし, (9):145-148.

後藤和夫, 2009. 奄美諸島“蝶”撮影記. 日本鱗翅学会中国支部会報, (10):11-14.

(Kazuo Gotoh : 〒759-0207 宇部市厚南7区平和町)

お知らせとお願い

1. 事務引き継ぎ

支部長、事務局の異動にともない「事務資料一式」の引き継ぎを1月中旬に行いました。現金、通帳、カード、印鑑、事務局資料ファイル(CD-Rとも)、バックナンバー綴りなど、すべてを間違いなく新支部に移管しました。

2. 支部助成金

2009年度分として本部へ申請済みの支部交付金については、会計報告のとおり入金がありました。2010年度分についてもすでに申請済みです。

3. 名簿等の取扱いと経費の節減

個人情報について慎重に取り扱わねばならない時勢に鑑み、本誌第7号でお知らせしたとおり名簿の掲載を取りやめています。事務局においては当然ながらこれまでどおり名簿管理をしていきます。また、情報伝達の迅速化や経費節減の観点から、第9回支部例会において、「一部の連絡(例会案内等)手段をPDF形式ファイルにより電子メールで行う」ことが承認されましたので、引き続き電話番号のほか電子メールアドレス等の情報収集を進めたいと考えております。差し支えない範囲で各県幹事又は事務局へお知らせください。連絡用書面の印刷、発送等の事務及び費用は意外とかなりの負担ですので、会員の皆様にも御理解と御協力をお願い致します。

4. 支部会報の原稿を募集

2011年4月に発行予定の「支部会報」第12号の原稿および表紙の写真を募集しています。

会員の皆様の近況等についてお知らせください。

5. 寄贈図書等の取り扱いの変更

これまでに寄贈を受けた図書および購入した図書は15冊あります(リストは「支部報第10号」参照のこと)。いままでは事務局で保管しておりましたが、移動するたびに本を送ると痛みますし経費もかかります。そこで、今後は後藤和夫・前支部長のもとで保管してもらうことにいたしました。閲覧・借用を希望される方は直接後藤和夫氏へ連絡して下さい。

6. 第12回支部例会のご案内



詳細は改めてお知らせします。お誘い合わせてご参加下さい。
他の予定と重ならないようカレンダーにメモをどうぞ。

- 日時:2010年11月13日(土)13時～
- 場所:山口市
- 参加費:会員500円、非会員1,000円

7. 日本鱗翅学会入会のおすすめ

「やどりが」No.217(p.71)の2008年度第1回評議員会報告にもありますとおり、会員数の漸減傾向から将来の学会運営の懸念が問題提起されています。本号に会費の払込票をつけた「入会案内」を同封しますので、所属の会合や採集旅行など、機会あるごとに同好者に声をかけていただきたくよろしくお願いいたします。

編集後記: 例年、季節の進行は1週間が三寒四温で進むのに対し、今春の場合は2週間のサイクルで進み、六寒八温とでもいう異常気象です。雪もけっこう多かったのですが、ギフチョウ発生は早いと予想しておきます(今日は3月10日)。編集作業は、前任の後藤さん、川元さんが過去のファイルすべてをCDに保存しておられましたので、参考にして短時間で終わることができました。印刷はオンデマンドという新しい手法によるものです。神垣さんにお世話になりました。(淀江)

日本鱗翅学会中国支部会報
第11号

発行日:2010年4月10日

発行人:淀江賢一郎

発行者:日本鱗翅学会中国支部

〒690-8504 松江市西川津町1060

島根大学生物資源科学部星川研究室気付

印刷所:株式会社 トライ・エックス

日本鱗翅学会中国支部規約

2001年12月2日制定, 2005年11月26日改正

第1章 総則

(名称)

第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。

(目的)

第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。

(事務局)

第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。

(事業)

第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 年1回例会(総会を含む)を開催する。
- (2) 年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
- (3) その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

(組織)

第5条 本支部は中国地区(広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県)に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。

(義務)

第6条 本支部の会員は住所(連絡先)、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

(種類)

第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。

- | | |
|-----------|----|
| (1) 支部長 | 1名 |
| (2) 事務局幹事 | 1名 |
| (3) 幹事 | 4名 |
| (4) 会計 | 1名 |

(選出)

第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。幹事(事務局幹事を含む)は第5条の各県の会員の中から推薦され(1名ずつ選出。自薦を含む)、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。事務局幹事は原則として支部長在任の県から選出された幹事がこれを務める。会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。

(職務)

第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。幹事(事務局幹事を含む)は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。

(任期)

第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。

第4章 例会、総会および会報

(例会の内容)

第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。

(開催地)

第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。

(例会の運営)

第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。

(総会の運営)

第14条 総会は支部会員をもって構成する。総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決すところによる。

(会報)

第15条 会報は例会を主催した幹事が草稿を作成、編集する。会報は事務局が発行し、例会開催翌年の4月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

(経費)

第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに当てる。

- (1) 支部連絡費(本部より交付) 200円/年/会員
- (2) 支部助成金(本部に申請)
- (3) 寄付金、その他

(資産の管理)

第17条 本支部の資産は事務局が管理する。

(決算)

第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。

(会計年度)

第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。

第6章 補則

(会則の変更)

第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。

(委任規定)

第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附則

この規約は、平成14年1月1日から実施する。
この規約は、平成18年1月1日から実施する。

(支部例会について: 第4回支部総会申合せ事項)

2003年から、学会員500円、非学会員1,000円とする。
参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。
総会開催中は会員外の者の傍聴は認めるが、発言権、議決権は認めない。